

七十七ビジネス大賞受賞

第13回(平成22年度)

企業 インタビュー

Interview

株式会社 木の屋石巻水産

代表取締役 木村 長門 氏



会社概要

住 所：石巻市吉野町二丁目1-26
石巻水産ビル2F
設 立：平成11年(創業：昭和32年)
資 本 金：100百万円
事業内容：水産加工業
電 話：0225 (23) 1234
U R L：http://kinoya.co.jp/eccube/

「金華さばみそ煮」等全国的なヒット商品を生み出すなど、地域資源を活用した付加価値の高い加工商品を長期にわたり製造・販売、地域活性化に大きく貢献。東日本大震災で本社屋・工場が被災し、復旧に向けて、新たな一步を目指す

今回は「七十七ビジネス大賞」受賞企業の中から、株式会社木の屋石巻水産を訪ねました。当社は、昭和32年の創業以来、鯨大和煮缶詰を県内で唯一製造している他、地元石巻に水揚げされた金華さば、さんま、いわし等を活用した缶詰等の加工食品を長期にわたり製造、販売することで地域経済を支えてきた点と、「多目的施設木の屋KANAKANホール」の運営など地域の活性化に取り組む姿勢が高く評価され、七十七ビジネス大賞を受賞しました。

しかし、3月11日の東日本大震災で発生した津波により、石巻地区は甚大な被害を受けました。当社においても津波により大きな被害を受けましたが、現在、津波をかぶった缶詰工場跡から社員やボランティアの方の協力を得て、大量の缶詰を地道に掘り出し、手作業で一つ一つの缶詰を綺麗に洗って、当社の缶詰を希望する全国各地の消費者に届けようと必死に頑張っています。当社の木村社長にこれまでの事業内容や現在の状況等についてお伺いしました。

味にこだわった製法

——設立から現在の事業形態に至った経緯についてお聞かせください。

昭和32年に私の父が石巻で創業しました。創業当時、主力商品であった鯨は最盛期の時代で、缶詰を作ればどんどん売れる時代だったと聞いています。もちろん楽な仕事ではなく、事業が軌道に乗るまで大変苦労いたしました。

その後、昭和50年代に入り、円高や捕鯨の規制、

200カイリ問題が発生し経営環境が厳しくなりました。当時、さば缶の輸出が多かった時代ですので円高は大きな打撃となりました。また、捕鯨規制により、鯨の商品が作れなくなったので、カニ缶を作ったり、鯨を扱う商品を縮小したりしました。昭和57～58年頃にはイワシが大量にとれるようになったのでイワシのミール（魚粉）へシフトしましたが、10年くらいでイワシも次第にとれなくなり下火となりました。しかし、同時期に調査捕鯨などにより、また鯨が水揚げされるようになりました。当社のように鯨の缶詰を残している会社は珍しく、その頃鯨を扱う業者は、他には全国でも大手の3社くらいでした。鯨の缶詰を復活してからは味も缶のデザインも昔のままのものを再現し、みなさんからも懐かしくて美味しいと好評をいただきました。

当社は、鯨の缶詰がメインといいましても、鯨の缶詰だけでは年間の操業が出来ないので、3月からオキアミ、5月の中旬から小女子、7月にはイワシ、9月にはサンマやさばなどを取り扱い、この時期以外は鯨やエンガワの加工品や缶詰を製造しています。



木村社長

——平成に入り、数多くの賞を受賞されていますね。

平成9年に農林水産祭水産部門で最高賞の内閣総理大臣賞を受賞した「カレイの縁側醤油煮込み」は、女川でカラスガレイの加工処理が多いということで、このカラスガレイを有効利用した商品はできないかと考えて開発したものです。薬剤師の方をはじめ色々な方に話を聞いたら、エンガワの部分がコラ

ーゲンやDHAが豊富だということで、時代にマッチした商品になると思いました。試行錯誤しながら商品を開発し、味付けも上手くいったので受賞につながったのだと思います。

その後、平成16年に第30回宮城県水産加工品品評会で「クジラデリッシー」が宮城県知事賞を受賞、平成17年には第31回宮城県水産加工品品評会で「くじらユッケ」が水産庁長官賞を受賞しました。

平成19年には第33回宮城県水産加工品品評会で「金華さばみそ煮」が宮城県経済産業部長賞を受賞しました。「金華さばみそ煮」については、受賞した平成19年の頃から大きいサイズの金華さばが石巻で水揚げされるようになったことから開発、販売した商品です。当社のフレッシュパック製法で、いつまでも新鮮で、味の落ちない缶詰の製造に成功しました。通常機械に任せるものを当社では人の手を加えて作業をしています。大量生産の缶詰と差別化を図り、大きくて、形のいい金華さばだけを選び、缶詰に詰めています。贅沢な製法のようなのですが、いいものを作って販売すれば、評判も上がり、また売れるといった好循環がもたらされたと考えています。

また、これまでの実績が評価され、平成21年には富県宮城グランプリ特別賞を受賞することができました。

せっかく作るのであればみんなが美味しいと思うものを作りたいと考えています。それは、社員自身で買ってでも食べたいと思うものでなければなりません。当社は味にこだわって製造しているため、規



金華さばみそ煮

模は追わず、中身で勝負しています。震災により工場は全壊しましたが、これからも満足のものだけを提供していくという考えに変わりはありません。

——「多目的施設木の屋KANKANホール」を建設された想いについてお聞かせください。

平成21年12月、地元石巻の皆様にも感謝の気持ちを届けたい、石巻で若い人が集まるようなおもしろい場所を作り石巻を元気にしたいという想いから「多目的施設木の屋KANKANホール」を建設しました。

この多目的ホールでは副社長である弟が音楽好きということで、音楽を楽しめる空間を作ったり、有名なアーティストを呼んでコンサートをしたりしました。この他にも、地域のイベントホールとしてご利用いただいております。

今回の震災で、「多目的施設木の屋KANKANホール」は津波の被害を受けましたが、建物は残っています。泥だしなどの作業は終わりました。今後の「多目的施設木の屋KANKANホール」の運営については未定ですが、震災前と同様に石巻を元気にするイベントホールとして利用できればと考えています。



多目的施設木の屋KANKANホール

夢と希望の水産業

——震災時の状況について教えてください。

道に残ったがれきを乗り越えるのが大変で、自宅よりほんの1 km先の工場まで震災後5日目によ



震災前



震災後

やく歩いて行くことができました。工場は流されて外枠だけになってしまい、本社もがれきだらけで使える状態ではありませんでした。また、当社のシンボルで、巨大鯨大和煮缶詰の形をした高さ10.8メートル、1000トンの魚油が貯蔵できる巨大タンクは、津波によりもとの位置から300メートルほど流された場所に転がっていました。

この状況を見て先の見えない不安はありました。しかし、取引先からの支援、社員の一日も早く復旧しようという姿勢に励まされ、現在は再建に向け頑張っています。

——一般社団法人三陸海産再生プロジェクトについて教えてください。

この社団は、三陸地域の水産業の復興を目的に、5月に設立した組織で、当社の副社長が代表理事を務めています。消費者などから募った会費や寄

付金を漁船購入や加工場の施設再生資金として貸与し、そこで生産された水産加工品や生鮮魚介類を会員に格安で提供するという仕組みとなっています。これまで別々に行われてきた漁獲から加工、販売までを一体的に手掛けることで、震災により甚大な被害を受けた水産業界の復興の足がかりとするねらいがあります。また、石巻の復興においても貢献できるのではないかと考えております。

この社団は当社とは別の組織になりますが、これからの支援をしていきたいと考えています。全国の会員と顔の見える関係を作り、お互い支えあう社会を構築することが目標です。全てがなくなったからこそ、ゼロベースで理想のモデル作りが必要であると思います。

地域間や企業間で競争している場合ではありません。後継者にも薦められるような明るい水産業界にこの際作り変えられればと思っています。当社では、『夢と希望の水産業』をスローガンに掲げ、震災前よりもより良い水産業界の実現を願っています。

希望の缶詰

——現在の状況はいかがですか。

40人の従業員は会社に残ってもらいました。また、採用予定の新入社員2名を迎え入れ、5月には入社式を行うことができました。

新聞やテレビ等にも取り上げられましたが、現在、泥で埋まった大量の缶詰を掘り出し、手で洗う作業をしています。表面はラベルのシールが剥がれていますが、缶は密封されているため、中身は食べて

も問題はありません。缶詰が非常食として大きな役割を果たすことができることを改めて感じました。地元で被災した方で震災直後当社の缶詰を拾って生き延びたとお話しされる方もいらっしゃるようです。そして、「命の缶詰」や「希望の缶詰」と呼ばれるようになりました。「あの味を食べられるのであれば泥だらけの缶詰を洗ってでも食べたい」と言ってくださる方もいらっしゃいました。震災以降、全国各地の方々の協力を得て、缶詰と引き換えに義援金をいただきました。いただいた義援金は社員たちに生活費として分配することができました。

また、ボランティアの方もたくさんいらして下さいました。今は、缶詰を洗う作業を手伝っていただいています。芸能人の方にもたくさんお越しいたきまして、色々な出会いがありました。みなさまには本当に感謝しております。

工場などの施設については、代替地を内陸の場所で考えていますが、水産業なので全ての施設を内陸に移すわけにはいきません。リスクをどのように分散していこうかと検討しているところです。津波で、倉庫や冷蔵庫に保管していた缶詰や原料は大きな被害を受けてしまいましたので、倉庫と冷蔵庫だけは水の来ないところに作らなければいけませんね。千年に一度の大地震とはいえ、またいつくるかわかりませんので、これからはさらにリスク分散をしていく必要があると思います。水の問題や衛生の問題など仕事のできる環境もまだ整っておらず、様々な障壁があります。ひとつひとつクリアしていかなければならないと感じています。



ラベルが剥がれ中身の分からない缶詰



拾い集めた缶詰を磨く作業



ボランティアの方との記念撮影

様々な問題を抱えている中で、震災以降、会社の中で嬉しい意味で変化したことがあります。それは週に一度、若手の社員たちが集まって勉強会をし、これからの会社の方向性について考え、今までの反省も踏まえ、どのような会社に今後なったらいいのか、本気で意見をぶつけ合っています。これは震災前にはなかったことです。震災におけるダメージは大きかったのですが、若手の社員のやる気のある姿勢を見ていると、こちらも石巻の復興のために当社は頑張らなければという想いを強くします。

——今、どのようなことが障害となっていますか。

ランドデザインの見通しが不透明な点です。道路の拡張とか、堤防の建築とか案は見据えているみたいですが、それに対する予算などはまだ決まっていません。復興計画が決まらない限りは我々もなかなか身動きもとれませんので、早く決めていただきたいと思っています。石巻の復興につながって、震災前のように安心して仕事につけるようなものであればいいですね。

——今後どのように活動されていくお考えですか。

会社の方向性はじっくり考えていかなければなりません。

岩手の缶詰工場さんにはOEM^(注1)で2000ケースほど缶詰を作っていただくなど、今回の震災で取引先企業にも色々助けていただきました。しばらく



「希望の缶詰」販売の様子

は、取引先のお力を借りてOEMによる生産を続けていかなければならないと思いますが、一日も早く自社で生産できるよう復旧しなければという想いです。

当社の缶詰を早く食べたいと個人的に応援して下さる方が全国にはたくさんいらっしゃいますので、みなさまの期待に応えられるように努めていきます。当社の復旧のために来ていただいたボランティアの方にも立派に復旧した当社の姿を見せて、恩返しをしたいと思っています。

一日も早く石巻が復旧・復興できるよう、自分たちにできることを精一杯取り組んでいこうと思います。



木村社長

長時間にわたりありがとうございました。御社の一日も早い復旧と、以前と変わらぬ美味しい缶詰の製造再開を心よりお祈り申し上げます。

(23. 9. 8取材)

(注1) OEM：発注元企業のブランドで販売される製品を製造すること。